

UDLM

2

vol.315

February 28th
2022

その
叙情に

- p.2-5 2021 年度修士研究を振り返って
p.6-7 2021 年度卒業研究を振り返って
p.8-9 先生方からのメッセージ
p.9 窪田亜矢先生 修了生への手紙

2021 年度修士研究を振り返って

「 何十年後にも、君がその論文に立ち戻ることだって起こり得よう
初恋みたいなものだったのだから、それを忘れることは至難となるう 」

— ウンベルト・エコ『論文作法』

1 月末には修士論文の提出と審査が行われ、都市デザイン研究室からは 10 名の修士 2 年生が発表を行った。本章では修士研究を終えたばかりの彼・彼女たちに以下 4 つの質問を投げかけ、それらへの返答を通して各自の研究活動を振り返ってもらった。修士研究は大学院在学中の 2 年間、あ

るいはそれ以上の時間をかけて取り組む、多くの学生にとっては初めての本格的な学術的活動である。その軌跡の記述は自らの来し方と行く末を俯瞰することでもあり、また綴られた言葉はこれからの歩みの拠りどころとなってくれるだろう。

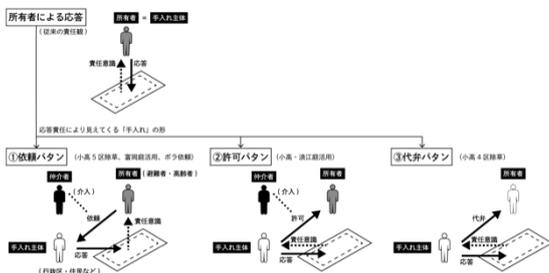
Question 1	対象地・対象・手法・明らかにしたことなど、修士研究の概要を教えてください。	Question 2	修士研究の推しポイント、好きなところ、頑張った点などを教えてください。
Question 3	修士研究において苦労した点、躓いた部分、もう少し工夫できたところなどを教えてください。	Question 4	修士研究を通して得た学び、およびそれを今度どのように活かしたいか抱負を教えてください。

原発被災後のまちなかにおける空き地への手入れに関する研究

- 福島県小高・浪江・富岡における実態比較から -

植田 啓太 UEDA Keita

Q1 福島原発被災後の小高・浪江・富岡の 3 市街地で、建物解体後の空き地がどのように変容し / どのように手入れされているかを、踏査・インタビューから明らかにし、空間への関与のあり方が被災前からどのように変わったか、空間を管理する責任とは何かについて考察しました。



Q2 M1 の春休みに、3 市街地それぞれで 100ha 以上の区域を歩きながら、一つ一つの建物 / 空き地の状態を記録するという調査をしました。ここから、三市街地の異なる復興の姿を現すことができたところがまず一点。そして、この調査を起点に様々な方向へ詳細な調査を行い、「手入れ」という概念を論じられたのが二点目です。

Q3 大災害によって放棄された大量の空き地に対して、「手入れ」という行為は余りにささやかで、それがどんな意味を持つのか、というのを考えるのが一番苦労した点です。空き地を手入れされたという方々の話を聞きながら、「責任」という言葉では言い切れない思いを感じましたが、それをうまく表現しきれなかったことが後悔です。

Q4 もともとは無住化した空間・空き地への関心から研究を始めたのですが、研究を進めるうちに復興とは何かということを考えさせられました。インフラや建物が建設されていく、目に見えやすい成果としての「復興」もありますが、それだけではなく、人の手によってまちが変わろうとする復興があることを、小高・浪江・富岡の皆さんに教えていただきました。この経験を糧に今後も福島に関わり続けたいと思うと同時に、災害復興の現場に今後関わることがあれば、この研究で学んだことを忘れずに向かいたいと思います。

COVID-19 影響下における子ども食堂の継続要因と役割の変化

- 東京都府中市内の子ども食堂を対象として -

岡本 亮太 OKAMOTO Ryota

Q1 府中市を対象に「COVID-19 影響下における子ども食堂の継続要因と役割の変化」について参与観察を中心に考察した。継続の主要因は「交流、食」という軸を残しつつ活動を変化させたこと。役割の変化は問題を抱えた利用者「気づき、適切な機関へ繋げる」福祉的役割が増したことであった。

Q2 本研究では湯浅先生による「子ども食堂を 4 象限で分類した図」の改良を繰り返し行った。現場に入り込むと活動が自分ごととなり研究と活動の境が曖昧になる。その際に思考を 4 象限にまとめ一般化を繰り返すことで、仮説検証としての活動とすることが可能となった。この思考の繰り返しから子ども食堂の今後に対する考察を深めた。

Q3 研究の思考フローに苦勞し、躓いた。今までは答えのあるものを解く練習ばかりであったが研究は自ら問い、仮説を立て、検証、考察、という繰り返しである。順調なときは楽しいが思うような結果がでないとき、それはもう壮絶なものであった。早めに研究とはなにか、マガジンや先輩方との交流のなかで知るべきであったと思う。

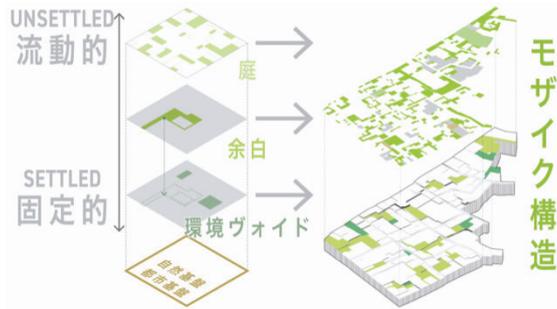


Q4 子ども食堂は地元住民による地元のための活動である。そういった近隣のコミュニティに他者である自分が入っていくという貴重な経験が出来た事自体が尊いものであった。来年からはデベロッパーという子ども食堂と対極にあるような形でまちへ関わっていく。そういったなかで利益を生み出すための街の良さでなく、「地域の人にとってどう街があるのか、その場に包摂されない人への対応はどうか、どう地域の人々の営みに関わることができるのか」そういったことから目を背けず、むしろ自分の都市に対する姿勢として持っていたいと考えている。

歴史的市街地における文化的景観の形成過程と住空間の応答
- 宇治市申宇治地域を対象として -

河崎 篤史 KAWASAKI Atsushi

Q1 宇治市申宇治地域を対象に、都市空間の変容を分析することで文化的景観の形成過程を明らかにした。自然・都市基盤に規定され維持される土地所有の単位や非接道・不整形画地が文化的景観を形成し、それらは「環境ヴォイド」と定義するオープンスペースの形態で発現する。



Q2 都市の文化的景観の考え方には強く共感する一方で、重要文化的景観制度が言及する景観とのギャップに違和感を感じており、そのギャップを埋めていくような議論を展開してきた点です。夏に文化的景観の第一人者のひとり、恵谷浩子先生に「新しい景観論」と言っていただき、それが内実を伴ったものへとなったのではないかと思います。

Q3 何を明らかにしたいのか？問いは何か？という研究の大前提が曖昧なまま12月を迎えてしまった結果、結論・考察のアウトプットを出すのに難航し一時は禿げるかと思った。また今回はフィジカルな分析にとどまったが、住み手へのヒアリング・アンケートなど定性的な調査によって、より文化的景観の真髄に近づけたかなと思います。

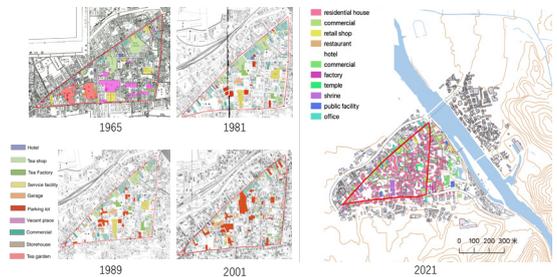
Q4 あえて学びの一つ取り上げるならば、卒業設計から追及してきた「都市をレイヤーとして捉えること」です。至極当然のことですが、都市は空間・時間・活動など様々なレイヤーの積層から成り、これを価値づけたものが文化的景観です。目に見えている景観だけでなく、その基盤となる文脈のレイヤーをどのように丁寧に抽出し、またその上にどのように次のレイヤーを形成していくのか、その視点や手法を熟考できたことは大きな財産です。今後のキャリアでは、自分の思考、発言、引いた線が次のレイヤーの一部となっていくという意識を持って都市デザインに関わっていきたいです。

Transformation of Relationship Between Tourism Activities and Residential Environment In the Center of A Historical Suburban City of A Tourism Metropolitan -A Case Study of Naka-Uji District, Uji City, Kyoto Prefecture-

崔 帥玲 CUI Shuailing

Q1 I research the transformation of the relationship between tourism activities and the residential environment in the center of a historical suburban city of a tourism metropolitan. Naka-Uji District in Uji City, Kyoto Prefecture is chosen as the case study.

Land use of Naka-Uji From 1963 to 2021



Q2 The impact that metropolitan brings to its suburbs is the unique insights and research perspectives. Mapping maps in different periods and counting the number of buildings with different uses took a lot of time. But after that, summarizing the changes and transformations of the land use and living environment is interesting.

Q3 As a foreigner not good at Japanese, choosing Japanese cities as the research object first faces the language barrier. This is also the impact of COVID-19 on research. Besides, I prefer to make a better schedule and time plan next time. Because I will have more time to make my research more in-depth and specific.

Q4 When I do research, I often think about the significance of this research. I have come to realize that more research is focused on urban areas. However, suburbs, as the border areas of the city, hold up to the pressure from the central city. They selflessly change and transform for the city's sake, and even may sacrifice their beautiful natural environment and other advantages in the process. Studying suburbs made me realize the importance of suburbs and their infinite value. In future research, I also hope to explore the laws of suburban development in more depth.

首都圏郊外集合住宅団地と近隣農村集落の関係性に関する研究
- 市街地縁辺における団地・集落の相補的な再生に向けて -

齊藤 領亮 SAITO Ryosuke

Q1 首都圏市街地縁辺において近接する団地と農村集落(40地域)を対象に、両者の「関係性」の観点から地域実態の把握を行なった。現地踏査・ヒアリング・文献調査を複合的に活用し、両者の空間的・社会的な「関係性」の諸側面における多様な地域特性の存在を明らかにした。



Q2 縁辺団地と集落が両者の課題と資源を補完するような地域再生の捉え方(=相補的な再生)を掲げ、最終的にはそれを曲がりなりにも空間的な整備イメージや管理スキームへの示唆として昇華できたこと。都市工で「概念を空間で示すこと」の重要性を身にしみて感じてきた中で、研究でも最後は空間に落とせたらと日々考えていたので。

Q3 参照できる既往研究が少なかったこと。そもそも団地と農村集落を1圏域として捉えること自体が新規性だったので、調査フレームをゼロから組み上げる必要があった。巨人の肩に乗らずに自力で何かを構築したことは達成感を感じているが、自分の論文の欠陥は自分が一番よく分かるものなんだと実感している・・・

Q4 人口減少・少子高齢化の影響を諸に受ける東京の「最果て」とも言える地域を何度も訪れて、よくぞここまで渋いテーマを選んだな、と我ながら思います。しかし、実際に足を踏み入れ、固有の資源や、そこで地域再生に関わる当事者の方々の価値観に触れる中で、むしろこちらが「最前線」なのではないかという印象さえ覚えました。今回の研究での経験や問題意識は必ずしも直接的に仕事には結びつかないかもしれませんが、テレワークや二拠点居住など多様な暮らし方が可能になる中で、何かしらの形でこうした地域に関わることができたらと漠然と考えています。

温泉都市における景勝地の空間変容とマストリーズの引き潮後の市民による復興運動

- 石川県加賀市の3温泉地を対象として -

鈴木 直輝 SUZUKI Naoki

Q1 石川県加賀市の3つの温泉都市において、柴山湯、萬松園、鶴仙溪という各温泉街に隣接する景勝地を対象とした。景勝地のマストリーズ前後における空間変容や市民による復興運動をもとに、景勝地の有する空間構造や社会的機能を明らかにし、景勝地の復興の方向性を検討した。

Q2 温泉都市の再生が叫ばれる昨今、温泉都市の地域性や施設の外部空間が重要視されている。温泉街再生に注目が集まっているが、本来その地域性を色濃く反映し、地域住民や温泉客の双方による利活用がなされてきたcommonsであった景勝地の再生こそが温泉都市の再生に寄与すると考え、本研究では景勝地再生の手がかりを見出している。

Q3 各景勝地のかつての有り様を読み解く絵図や古地図、古写真などの史料を集めることに最も苦勞した。地域の方々のご協力により充実した史料の収集と、それに基づく分析が可能になった。また、近年の景勝地の様子や復興運動の様相についても、地域の方々に繋いでいただきヒアリング調査を重ね、現場をリアルに捉えることができた。



Q4 本研究で扱った温泉都市の景勝地の変遷と市民による復興運動というテーマについては、私がこれまで大切にしてきた「まちと自然の関わりにおける都市デザイン」「子どもや市民の参画する都市デザイン」という2つの視点に通じるものがある。また、本研究には「都市デザイン研究室における研究者」と「復興運動の実践者」という2つの立場で取り組んだ。修士論文を通じて、この2つの視点と2つの立場をより明確に捉えることができ、自分自身の羅針盤を手に入れることができたと感じている。この羅針盤を携え、今後とも複眼的な姿勢でより一層様々なことに挑戦していきたい。

明治神宮表参道の並木街路景観を編成する沿道建築物と街路樹の関係

- 建物内外からの街路横断方向の分節的視点に基づいて -

谷本 実有 TANIMOTO Miyu

Q1 表参道を対象に「沿道建築物と街路樹の関係」の意図と実態を「建物の外からどう見えるか」と「建物の中からどう見えるか」という街路横断方向の視点で明らかにした。新建築から設計者の街路樹についての意図を読み解き指標を得たのち、自作した立面図を用いて実態の分析を行った。

Q2 これまではパース的に分析されていた並木街路景観を個々の建物と街路樹の関係の集積として扱ったのがポイント。立面図は3Dモデルを使用しながら詳細に作成した。130本以上ある街路樹の樹高と枝幅も反映している。特に建物内から街路樹がどう切り取られて見えるのか視覚的に明らかにした「裏立面図」のビジュアルが気に入っている。

Q3 テーマも対象もなかなか定まらず、焦りや時間不足で苦勞した。関心事を研究にするにあたって、具体的な分析手法がわからないことに躓いてしまった。早くから色々な文献を読んで知見を整理しておくべきだった。もう少し分析に使う時間があれば、オリジナルの図面や情報を掛け合わせて、さらなる示唆が得られたのではないかなと思う。



Q4 研究で提示した「建物と街路樹の関係」についての新しい視点は、今後のランドスケープデザインの糧として大事にしたい。特に、建物内からどう見えるかということは屋内外を一体的にデザインする際に生きる視点だと思う。また、研究について一時はもう間に合わないかと思うこともあったが、何とか乗り越えることができ、諦めない気持ちの重要性を感じた。これからもあらゆる物事にねばり強く挑戦したいと思う。研究していた期間を通じて、先生方と同期のみなさんをはじめ、多くの方々に助けていただいた。感謝するだけでなく、私も周りに貢献できるような人を目指して努力したい。

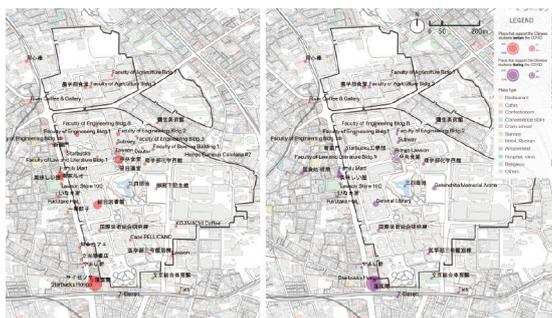
A Study on Places That Support Chinese Students' Life in the University Area During the COVID-19 Pandemic -A Case Study on the Hongo Area of the University of Tokyo-

陳 瑾瑜 CHEN Jinyu

Q1 This research studied the places that supports the Chinese students' life in Hongo university area of the University of Tokyo. The study set out to investigate the role of these places through the clue of significant transitions during the COVID-19 pandemic.

Q2 First, the thesis focused on the place instead of the existing neutral space. Secondly, this paper did help to make up the absence of previous research studying the relationship between international students and place. Furthermore, it was about the situation in the present moment with the pandemic.

Q3 It was challenging to ask people to finish a questionnaire that could take them more than fifteen minutes. I really appreciate the respondents, but the samples were still not enough to get a persuasive conclusion. Besides, more work will need to be done to find out the situation of different student cultural groups.



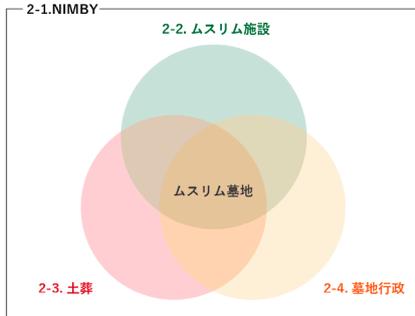
Q4 The process of this research taught me how to think and work by myself, which is totally different from the teamwork in the design projects that I was familiar with in China before. Moreover, it helped me build up some logical thinking and different ways of seeing a problem in a new light that I'd never noticed before. But most importantly, I believed that even though what I gained from this experience might not directly help with my career, it still taught me never to fear to challenge the unknown in the future.

滞日ムスリムの墓地取得運動の定性的分析

- 別府ムスリム協会の「権利運動」への展開に着目して -

藤本 一輝 FUJIMOTO Kazuki

Q1 慣習の観点から土葬墓地確保を目指すムスリムの墓地取得運動の歴史と、とりわけ別府ムスリム協会の運動に着目し、その主張と運動の動員構造をヒアリングや文献から分析し、わが国においてムスリムとノンムスリムがともに暮らす社会を構築する上での方法論的示唆を得た。



Q2 現在進行系で更新されつつある問題に対し並走するかたちで理論を組み上げ、墓地取得運動の当事者のみならず反対者や一般のムスリムに至るまで自分と縁のなかった方の幅広い意見を収集、分析できたこと。今後類似するテーマを取り扱う研究が生まれる可能性があるなか、批判対象となりうるような論文に帰着させることができた。

Q3 社会運動研究として資源動員論に紐付いた解釈を行ったが、論の展開が緻密さを欠いた。また、ランドスケープデザインや都市計画における墓地の位置づけという観点も切り口として考えたものの、自分の技量としては捌き切ることができなかった。モスクに通い、特に移民第1世代のムスリムの方々とラポールを形成したかった。

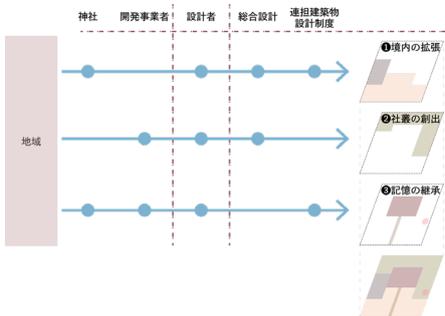
Q4 あまり触れてこなかったようなテーマであっても、9ヶ月ほど取り組みれば、一定の知見を獲得し、提言できると気付くことができた。テーマを決めたのが2021年4月、本格的なヒアリングに差し掛かったのが8月であった。M2スタート段階で土葬問題や墓地埋葬行政について全くの無知だったが、手早く情報を掴んで体系化する能力は時間に追われがちなコンサルの業務において活かそう。また、本論文の執筆時には多くの研究協力者の方々にお世話になりました。研究を通じて得られた縁を大学院修了とともに終わらせるのではなく、今後も大切にしていきたいと感じています。

東京都心部における民間都市開発事業に伴う神社空間整備のあり方

- 六本木天祖神社の地域空間としての再生に着目して -

松坂 大和 MATSUZAKA Yamato

Q1 東京都区部の民間開発事業に伴って空間整備が行われた神社を対象として、活用制度と登記、地図等から各神社の空間変化を把握。特に再生が実現した事例として六本木天祖神社についてヒアリング調査等を行い、神社空間の再生プロセスと都心における地域空間としてのあり方を論じた。



Q2 神社・事業者・設計者・地元住民(+地域の歴史)と神社空間整備に関わるほぼ全ての目録を包含し、関連法制度や登記など事業の実施にあたっての変化を権利の面からも捉えたこと。歴史的・地域的な空間の保全や再生を民間事業の中でどう実現するか、という都心部における課題に対して、より実務的な面からも迫ることを意識した。

Q3 民間都市開発事業が行われる前の神社の状態についての情報収集には苦労したが、当事者だけでなく、その地域においてキーになる方を早めに見つけてあたることはできたと思う。また、制度によっては情報が行政で管理されていない、もしくは公開されていないものもあり、特に施設整備の面では得たい情報の不足が否めなかった。

Q4 空地や緑地があれば良いのではなく、その場所が地域でどのような文脈に位置づけられているのか、それをどう継承するか、ということへの意識を各主体が持つことの重要性を学んだ。地域について考えるということをや日々PJ活動等を通じて行っている私たちにとっては至極当然の結論ではあるのだが、それが最も開発圧力が高い都心でも実践されていることを把握できたことに意義を見出したい。一方で、民間開発事業については働く中で初めて見えてくる部分も多いと感じる。研究としてはここで一区切りになるが、今後も事業者としての立場から考察を続け、かつ実践していきたい。

COLUMN マガジン編集部 M1 座談会「修士研究への意気込み」

Q. 来年度の修士研究に向けた意気込みは？



「卒論とは異なる手法でアプローチしたい！」

– 卒論と同じ対象地を扱うので、研究の問いに対する答えはもちろん、スキルとして、自分ならではの新しい研究方法を生み出したい。卒論でできた地域との繋がりを大切にし、第二の故郷をつくる気持ちであと一年間を走り抜きたい。



「コツコツ進捗を生み続ける！」

– ヒアリングや文献調査など、M1からできることはどんどんやっていく。自分は何事も行動から入るタイプ。足跡無く対象地に通い、目の前のことを一個ずつ着実にこなすことを大事にしていきたい。

「より広い視点から自分の専門を俯瞰する！」

– これまではランドスケープを主に単体で見えてきた。修士研究では、都市に存在する交通や生活、土木といった面からもランドスケープを見ることで、相対的に特異性や独自性、デザインをする上での新たな視座を手に入れたい。



杉本 莉菜

「足で稼ぐ！」

– 理想とする研究対象を選定するところまではM1で進めることができた。幸いにも対象地は東京都、神奈川県、埼玉県にあるので、フィールドワークを大事にしながら、ゴリゴリ深掘りしていきたい。



若松 凜人

「設計では見せられなかった対象地の未来を！」

– 卒業設計と同様の対象地で取り組むからこそ、そこで計画したものと地続きで、自分なりの復興像の模索を継続したい。地域の方々へ届けることを意識しつつも、残りの期間、ひたすら自分の原体験と向き合い続けたい。



渡邊 大祐

2021 年度卒業制作を振り返って

「
勇気をもって思考を未来に向けなければならない
形こそは言葉なき対話の手段だ
そして無数の人同士が相互理解を深めるための基盤である
」

— 内藤廣『形態デザイン講義』

2月上旬に卒業制作の提出と審査が行われ、都市デザイン研究室からは5名の学部4年生が発表を行った。自ら対象地を選び、テーマを設定し、案を構想し、形を決める過程を初めて完遂した今、彼・彼女たちは何を考え、

何を思っているのか。以下4つの質問とその返答を通して各自の制作活動を振り返ってもらいつつ、この経験がそれぞれの歩む道に何を残すかを綴ってもらった。

Question 1 対象地・テーマ・提案内容など、卒業制作の概要を教えてください。

Question 3 卒業制作において苦労した点、躓いた部分、もう少し工夫できたところなどを教えてください。

Question 2 卒業制作の推しポイント、好きなところ、頑張った点などを教えてください。

Question 4 卒業制作を通して得た学び、およびそれを今度どのように活かしたいか抱負を教えてください。

堰共生区

- 御殿場堰から拡がる水・緑と拠りそう人々のまち -

音山 尚大 OTOYAMA Naohiro

Q1 山形県山形市を対象地に「堰」という水路の再生及び街区設計モデルの提案。現状使われていない堰を街区単位で管理しまちづくりに活かすシステムを構築し、街区内部に堰と繋がる水・緑等の環境要素を配置し豊かなコモンを創出して堰の再生と住空間向上、コミュニティ活性化を狙う。



Q2 設計の概要上、水の扱いが重要なポイントとなり、ローカルな住空間に水をどう導入していくかを一番考えた。また閉じられた空間の中で生活するのは好きではなく、豊かな外環境を有する広々としたコモンを生活空間の一部にするという個人の空間デザイン上の好みを設計に少しでも反映できたところがこの卒制の好きな点となった。

Q3 スタディの進め方がわからずその時期にやる必要のないことを何度もした、図面や色の表現が定まらず何度も修正した、模型製作も手探りでヘルパーのマネジメントに苦労したなど挙げればキリがない。また自身のやりたいことを最大限表現できたとは言えないので、10月～11月に更に思考を深める過程が必要だったと感じた。

Q4 卒業制作は少なからず悔いの残るものですが、これが今後の専攻分野や進路なども含めて自身のやりたいことを見つける大きな手掛かりとなったと思います。今後研究やプロジェクト、コンペや就活に臨む際、判断するための大きな指針になることを期待しています。また卒制を進めるにあたって表現等の各種スキルも身に付き、研究室に常時いたことから修士のプロジェクトや研究の空気感も知ることができ、進路選択などへの大きな参考にもなりました。何より卒制を乗り切ったことでついた自信をもとに、色々な活動に手を伸ばし積極的な行動をとっていきたいです。

たまりばのすゝめ

- ポストコロナの近隣コミュニティ像 -

橋 俊輔 TACHIBANA Shunsuke

Q1 対象地：京王線芦花公園駅近辺。内容：ポストコロナの社会において、リモートワークの普及などによって生活が変化した層が暮らしやすい近隣コミュニティを、対象敷地に現存する自然資源の再生、京王線高架化に伴う街並みの分断の解消などと絡めながら提案する。



Q2 対象敷地自体、駅からも近く暗渠になっている河川など、興味深い要素が満載で是非一度訪れてみて欲しいです。また、慣れない模型での表現に最も労力と時間を割いたため、周辺模型は緑道の表現、詳細模型は添景の密度感と活気溢れる人々のアクティビティの様子表現が推しポイントです。

Q3 体を通してポストコロナの社会に関する提案、というテーマは一貫していたのですが、それに付随するテーマがブレてしまい、当初想定していたテーマや敷地からはかなり離れた提案になってしまいました。また、模型制作が2Aの演習以来であり、試行錯誤をしながら進めていったためもう少し効率的にできたのかなと感じました。

Q4 研究において初志貫徹することの難しさを実感しました。今回の卒業制作では、調べていくうちに新たな発見があり、周りの意見にもどンドン流されてしまった反省を活かし、今後は周りからの意見を取り入れつつも、自分の中にブレない軸を持って研究を進めていきたいと考えています。また、ありがたいことに多くのヘルパーに模型制作を手伝っていただきましたが、卒業制作ならではの、ヘルパーのマネジメントの難しさも実感しました。大人数のグループを主導する経験は今後も必ず生きてくると思うので、是非今後活かしていきたいです。

『折り合い』

- 小さな崖に息づく包摂の素形 -

平野 真帆 HIRANO Maho

Q1

板橋区小竹向原の台地に建つ閉鎖的な障がい者施設と低地の周辺地域との境界にあたる段差に、両者の活動の場を引き出して来る提案。一枚の面から折ってできた形の緩やかにつながる空間群では使い方や使い手が移ろい、区分にとられない自然な関係性へと解いていく。



Q2

まず模型は、暖かくもあり切なさもある色合いになり王道でない素材もうまく活用できて気に入っています。障がい者福祉という重く扱われがちなテーマでありながら柔らかな提案になったのも良かったと思います。そして何よりかたちの考え方で独自性を出せたこと。段差や既存樹に溶け込むような見た目がお気に入りです。

Q3

自分で考えたかたちの作り方を使いこなせるまでに時間がかかり、ずっと自分で自分の首を絞めているような状況でした。そのせいか二週間前位まで白紙に戻したくなる気持ちに何度も見舞われ、同じ方向性で進み続けるのが辛かったです。それから直前期はアウトプットの量を少し減らしてでも丁寧に作りたかったという後悔があります。

Q4

課題を訴え、より良い空間のあり方を模索し、その魅力を信じて表現し、伝える。学部後半の演習は班で誰かの肯定を待って進めることが多かったので、これを一人でやり切ることにも何度も不安を感じてしまいました。でも、最後に形になった時に自分を納得させられた感覚は初めてで、やりきれなかったことがたくさんある中でも私の救いです。また、形を何度も検討することの意味や尊さに気づけたことで、今後都市や建築に限らずデザインに取り組む姿勢/見る目が変わったと思います。近所で見つからなかった対象地・支えてくださった方々との出会いに感謝します。

大船エキニワ構想

- 風景と結節する廻遊型ワークプレイス -

星野 祐輝 HOSHINO Yuki

Q1

郊外ターミナル駅の新たな在り方として、そのポテンシャルである自然環境と多様な利用者属性に着目し、日本の風土の一部となっている「ニワ」性を取り込むことで、従来の「エキナカ」に代わる「エキニワ」を提案するものです。



Q2

「日本的なもの」「日本庭園的なもの」を意識して表現しようと思いました。模型の色合いは意識していて、白を基調としつつ対象の模型は自然の素材を使うようにしました（本来は1/200で表現したかったのですが）。

Q3

時間管理が難しく、自分が目指していたクオリティのものを出すことができなかったことが悔しいです。特にコンセプトが決まってから、形に落とすまでの作業は公共空間ということもあり、苦勞をしました。

Q4

卒業制作を通じ、様々なスキルや設計に対する姿勢を学びました。そして、どのように表現すれば伝わるのかを練習することができました。また、自分がまちに対して「こういう空間があった方がいい」という考えを持てるいい機会になったと思っています。今後、プロジェクトをはじめとした活動を通じて、自分が都市空間に対して思い描く際の指針にしていきたいと思っています。

奈良山の辺、千年の巡り

- 石上神宮外苑・天理教徒墓苑 -

森屋 友佑 MORIYA Yusuke

Q1

対象地は奈良県天理市。天理教と神道という2つの文化が対立する敷地において、天理教が死者を祀る墓苑、石上神宮が木材を生産する外苑をそれぞれ運営し、両者が80年の周期で循環的に操業するシステムを提案する。



Q2

1/500 模型は、たくさんのヘルパーに手伝ってもらって、3000本（推定）の木を一本ずつ作り、植えました。発表前日に先輩方に模型写真を撮影していただきましたが、影の落ち方がとてもきれいでお気に入りです。

Q3

墓苑の設計、園路の設計、CAD、レンダラー、模型表現など、経験不足ゆえに「はじめての挑戦」だらけでした。締め切りの直前は特に、スキルを身につけながらアウトプットしていくことが続き、てんてこまいでした。

Q4

先生方、先輩方にたくさん助けていただき、なんとか提案を作れましたが、自分独自の視点、都市への思いが欠けていたことで、最初から最後まで悩みました。作品と自分のパーソナリティの関係を見出せなかった悔しさを忘れず、修士でも精進します。修士の研究内容はまだ決めていませんが、何らかの形で卒業制作を発展させられればいいなと思っています。

先生方より、修了生と卒業生へのメッセージ

宮城俊作 先生

修論・河崎

何度も現地へ赴いての綿密な調査と精緻な分析、考察によって対象地の文化的景観の本質を明らかにするとともに、将来にむけたビジョンを提示している点を特に評価したいと思います。文化的景観の概念を、保護や保全の手段から再生と創造のための手段へと進化・発展させる手がかりが見いだされたことは、対象とした一つの地域にとどまらず、広く普遍的な価値を有するものではないでしょうか。

修論・崔

宇治プロジェクトでの活動を修士論文のテーマにつなげることができたことは幸いでした。当初予定していた、中国・洛陽市との比較研究ができなかったことは残念でしたが、Covid-19 パンデミックのもとではいたしかたないことだったでしょう。Tourism Metropolitan という概念に基づいて、その影響下にある郊外都市との関係を考察することは、次代の観光を考えるうえでたいへん基調な示唆でした。

修論・谷本

具体的なテーマが二転三転するなかでも、なんとか最終的な研究成果にまでたどり着いた粘り強さに敬服します。街路樹の景観的な価値を、街路軸を中心とした街並み形成の観点から検討してきた従来の土木的な手法をはなれ、個々の沿道建物との関係において検討する建築的な発想は、今後、個別の市街地更新がすすむ場合の街路樹の保全再生にたいへん有意義な視点をもたらしてくれると期待されます。

卒制・音山

自身が生まれ育った山形の街に対する想いが色濃く反映されたとても良い提案であったと思います。歴史的に継承されてきた堰のネットワークが有する価値を丁寧に評価し、現代的な都市空間のリノベーションに組みこんでいくプロセスはたいへん明快で、多くの地元市民の共感を呼ぶのではないのでしょうか。暮らしの中で水を活かす様々なディテールにまで注意が行き届いている点は特に高く評価できます。

卒制・森屋

壮大な時間と空間のスケールを横断する構想力に感服しました。日本の古代史が幾重にも積層する奈良・山の辺の地は、ある意味において様々な宗教的な意味を纏う空間がせめぎあっている場所です。時として矛盾し対立するこれらの場所性を止揚し、その関係を創造的に読み解き、林業生産を通じた物質循環のサイクルを組みこむことで、現代的な価値を空間化・景観化している点が特に高く評価されます。

修士研究の総評

修士課程2年次生の数が例年になく多かったこともあり、今年度の修士研究のテーマは、実に多彩なものであったと感じます。具体的な都市空間や景観の設計計画を扱うものから、社会的包摂をめざして社会学的なアプローチを選択したものまで様々ですが、研究室会議を通じてアプローチの仕方や研究方法を相互に参照する機会があったことにも相応の効果を認めることができるでしょう。結果的に研究の具体的な対象とした土地、場所、空間も多岐にわたることになり、広義の都市デザインが意味する幅の広さ、奥の深さ、視程の長さを体現することができていたのではないのでしょうか。

卒業制作の総評

今年度は5名全員が制作を選択しましたが、昨年度までと比較すると、具体的な提案が形になるまでに要した時間が少し長かったのではないかと考えられます。このことは、必ずしもよくないことではなく、それだけ、課題の本質(what)と社会的意義(why)を突き詰めようとした結果だと言えなくもないからです。これに対し、どのように解くか(how)の技法についての情報は世の中にあふれているので、さほど時間をかける必要はなかったかもしれません。むしろ、プレゼンテーションにもっと時間をかけ、提案内容を最も効果的に表現することに注力することが必要であったでしょう。

中島直人 先生

修論・鈴木

学部時代からの地域の方々との実践的な活動の意義を、歴史的展望のもとで捉えることを試みた意欲的な論文。「復興運動」という大仰な概念も、鈴木君の取り組みの実績があったので、違和感なく受け入れることができました。温泉街再生の指針とともに、都市デザイン研究室の活動的院生が書く論文のあるべき一つの型を提示してくれたように思う。鈴木君には、この論文の続きをずっと期待していたい。

修論・陳

良くも悪くもCOVID19の影響を受けたことで、今しか書けない論文になった。紆余曲折はあったが、中国からの留学生に絞って議論したことで、完成度は高まった。学外のインフォーマルな居場所について深く掘り下げて記述した章が秀逸であった。今後、この論文を開くたびに、陳さんの日本での2年半の時間がどのようなものであったのかに思いを馳せ、ある種の感慨を感じるようになるだろう。

修論・藤本

藤本君はこの社会において自分がやるべきことを、ぶれることなく、ずっと持ち続けようとしている人だと思う。あるいは、この論文の執筆を通じて、その意思がより強固になったのであれば何よりである。論文内容については、一見ニッチに思えるテーマから、普遍的な問いを立てたと評価したい。NIMBYや権利獲得運動という側面と同時に、日本の既存宗教の共生社会的インフラとしての意味について気づかされた。

修論・松坂

その地に長く存在してきたし、これからも存在し続けるであろう神社と、この20年ほどの都市再生政策を背景とした都市開発事業という時間スケールの異なる都市空間の融合の現状と課題について、制度的側面とともに、具体的な都市空間のありようを論じることで、思考の手がかりを提供してくれた。この論文の執筆を通じて、都市空間への介入に対する自分なりの哲学を獲得できただろうか。松坂君の今後に期待している。

卒制・橋

ポストコロナのコミュニティ構想というタイムリーな課題に果敢に挑戦したこと自体に価値がある。小河川が生み出した微地形やその地域的な連なりを読み込んだ配置計画はそれなりに説得力を持ったと思う。ただ、個々の建物やオープンスペースのデザインは、土地の持つ細やかな手がかりや新たな生活像の要請に回答するには時間が足らなかったか。続きは修士課程で、また別のかたちで探究してほしい。

修士研究の総評

修士課程の2年間でコロナ禍に当たってしまったが、一人も脱落することなく、個性的な論文を仕上げてくれた。本音を言えば、もっと対面で相談にのり、口角泡を飛ばしたかった。それはそうと、修士論文は今後の専門家、あるいは都市生活者としての皆さんの行動指針の一つを形成するもの。これからの人生において迷いが生じたときには、自分の論文を読み返し、できたこともできなかったことも、プロセス全てに思いを致し、ピュアな問いを再確認してみるとよい。そして、修士論文で成し遂げたように、自らの思考と活動を通じて、問いを、想いを社会に投げかけられる人であり続けてほしいと願っている。

卒業制作の総評

毎年、設計の内容だけでなく、皆さんが選んだ対象地に大に関心を引かれる。いやむしろ設計という行為を通じて、今、つい対象地と呼んでしまった土地、地域固有の時間や空間、そこでの人々の生活のありようを深く理解する経験こそが、卒業設計の重要な意義なのである。どこまで理解できたか、そして自分だけでなく並走した仲間たちの土地、地域についても自分の糧にできたか。今年度は芦花公園、小竹向原、大船、天理、山形。私が実際に訪問できたのは前者3つで、天理の石上神宮と山形の御殿塚には行けなかった。ぜひ、近いうちに皆と一緒に訪ねて、現地でそれぞれの卒業設計の講習会を催そう。

永野真義 先生

修論・植田

もはや空き地という用途を、商業や住宅等等価値の重みで扱う必要がある。原発被災地の精緻な実態記述から伝わるのはそんな現実の到来である。誰かが管理してくれる／すべきであるといった他人の空き地があったとすれば、これからは応答責任としての手入れを突きつける空き地が目の前に迫ってくる。ただそこに、希望も見る。終章の考察は、著者自身が手入れを実践してきたからこそその読み応えがある。

修論・岡本

社会的弱者を対象とするとき、事象を決して二項対立で捉えないし、捉えたくない。だからこそ目の前の無数の段階性や複雑性に対し、思考を整理し、言語化・図化すること自体に困難を伴う。この論文の慎重な言葉の選択・表現には、実態を肌で感じてきた著者だからこそその正直な戸惑いが適切に露わられているのではないか。自分のことで精一杯になりがちな時流の中、困窮者に寄り添い続けた姿勢に敬服する。

修論・齋藤

根底にある眼差しが力強い。それは学部から大学院まで一貫していた。つまり住む場所のデザインは、身近な自然環境に積極的に働きかけることの必要性を前提になされるべきではないか、という問い。「相補性」をキーワードに極めて明快に論理展開され、誰もが理解できるビジュアルな提案で括られた修士研究もまた、その答えを探す一連の旅のひとつだった。勝手にそう解釈し、また次の旅に期待している。

卒制・平野

L.カーン曰く、偉大な建築は測り得ないものとともに始まり、測り得る手段を経て、最後は測り得ないものへと至る。「折る」という感性的スタディ方法に、地形への応答と適切な床勾配の確保という条件が重ねられてできた、建築でも土木でもない、園路のようで遊具のようでもある動線体。この作品は、デザイン手法としての新しさを携えつつ、包摂という難題についての多くの問いを、私たちに投げかける。

卒制・星野

大規模結節駅、大船。街は必然的に、駅と共に生きる運命にある。駅はいつまでもラッシュと満員電車のためでよいだろうか。電車を降りると水盤越しに射す自然光。階段上の緑の丘は背後の玉縄の杜へ連なる。丘の上から街を見晴らし、眼下に電車と人々が往来する。佇むように仕事し、商店街で一杯やって帰路に。色んな生活の速度がここで交わる。この駅となら、大船ならではの暮らしを育てていけそうだ。

修士研究の総評

今年のM2は総勢10名の大所帯。年が明けてラストスパートをかけあう10階生室の熱気は、どこか懐かしく、かけがえのないものだった。コロナ禍でそういう場面がなくなっていたからか、私自身の修士同期も10名だったからか。お互いの研究に遠慮なく口を出し合う土壌は、一朝一夕には培えない。プロジェクトやマガジンを通じて、醸成してくれていたのだろう。大学院に入るや否や緊急事態宣言となり、我慢ばかりの2年間。しかし研究内容はどれも、実空間で実践し、小さな声を拾いあげ、微細な変化を記録し、独自の資料を集めたものばかりだった。仲間と完走した経験を、誇りにして欲しい。

卒業制作の総評

クライアント不在の卒業制作では特に、提案したプログラムと空間とを自ら様々な角度で批評するプロセスが重要だ。教員や先輩との密なコミュニケーションは確実に作品の質を高めるが、主体は常に自分自身であるべきだ。他者の意見を咀嚼し、吸収し、実践し、反発する。本当の意味で自分の案が形成される。その蓄積を感じさせる作品に、個人的共感を覚えた。没頭して取り組んだ卒業制作はスルメのようなもの。今後も自己批評を繰り返して、味わい返してみたい。経験と成長は自身に対する評価を変えていく。そうして常に自分の中の「心地よい都市空間」をアップデートし続けて欲しい。

窪田亜矢先生 修了生への手紙

昨年度まで都市工学専攻・地域デザイン研究室の特任教授を勤め、今年度から東京大学の生産技術研究所の所属となった窪田亜矢先生。修士

研究を終え、この春に都市デザイン研究室を巣立つ修了生へのメッセージを綴って頂いた。

修士を修了された皆さんは、これからの2年間で修士研究をまとめます、と宣言をして、この2年間で過ごしてきたわけで、考えてみれば極めて危ういことです。声に出して宣言した人はいないかもしれないけれど、学費を出してくれた方や真摯に暖かいご指導をくださった都市デザイン研究室の先生方、調査先でお世話になった方々、就活先などには、そうしたことをするのだろう、と予期させたという意味では宣言と言っても差し支えないでしょう。それを重荷に思ったことはないですか。修士研究なんてまとめられないかもしれないのに、自分はみんなを騙しているのではないかと、もっというと自分自身も騙そうとしているのではないかと感じたことはないですか。

極めて危ういというのは、主に二つのことに起因していると思います。一つは、未来がどうなるかは誰にもわからないということ、もう一つは、(少なくとも私たちの分野において)研究とは正解が定まるような性質のものではないということ、です。その二つが合わさると、自分の取り組んでいるテーマは意味がないとか、自分の分析があまりに恣意的であるとか、期限内に提出するために意味のない作業をしているのではないかと、色んな不安が次から次へと湧いてきます。

この手紙の名宛人である修了生の皆さんは、極めて「危うかった」、色んな不安が次から次へと「湧いてきたな」という過去形の経験として、この2年間で振り返るのかもわかりません。この文章の後半には、それでも修了まで漕ぎ着けたのは素晴らしい、不安が湧くのは誠実さの証、などと励ましが続くだろうと、無意識に期待するかも知れません。残念ながらそうではありません。

もし皆さんが、これからどこかの具体的な地域において、空間のあり様を提案する職業を担うのであれば、そうした危うさや不安から逃れることはできません。そのような職業は、正解が定まるような性質ではないし、誰にもわからないはずの未来に対して何かを負わざるを得ません。そしてもう一つ、問題の中心が自分から地域に移動するという点は、極めて重い事実です(修士研究が完成するかしないかの影響は、ご本人が最も強く受ける、という一般論の単なる仮説です)。職業として担うということは、その地域に住んでいたり、その地域を愛していたりする人の問題に立ち入っていくことを意味します。畏怖するしかありません。

危うさと不安と畏怖を抱えながら、それでも何らか続けていこうと思うなら、どうぞ続けてください。応援したいと思っています。応援とは小高プロジェクトの議論の中で植田啓太君が使った言葉です。奥の深い言葉ですが、私なりに思うことは、応援とは私という一個人の中にあるのではなく他者との関係だということです。だから、ただ応援してほしい、という姿勢では応援はうまく生まれません。応援は、する側とされる側という非対称が固定する関係ではありません。

また、応援を支えるものは、友達であれば友情かもしれませんが、修了生の皆さんと私の関係の基底にあるのは、研究を通じてのつながりだろうと思います。研究とは、考え続ける態度のことです。研究を通じてのつながりを、私が初めて強く意識したのは、都市デザイン研究室の助手のときでした。当時、修士課程だった中島直人さんと鞆の浦に通い、進行中の埋立架橋計画に対して、調査の結果や代替案を「鞆雑誌」としてまとめる過程で、本当に多くのことを語り合い、学び合いました。中島さんの愛車がVespaだと知ったのは、研究室会議の配布資料の片隅にそう書いてあったからで、先に友達だったからではありません。研究を通じてのつながりというものがあり得ることを知ったことは、今に至るまで私を支えています。永野真義さんと足助に通い、一歩一歩うちがわをめぐる「うちめぐり」提案へと至った過程も、そのようなつながりがあったからで、永野さんらはさらに様々なつながりを編んで、私がプロジェクトを抜けた後も足助に通いました。その様子を私がどれほど有難いことかと感じたかはご想像にお任せします。修了生の皆さんは、宮城俊作先生ともそれぞれに固有のつながりを持っていることでしょう。研究を通じてのつながりは、他者や差異を歓迎することができます。どうぞお忘れなく。

そして都市デザイン研究室を思い浮かべるとき、私は入り口に座っている五十嵐佳子さんを思い浮かべます。空間の意味を考えるとときに忘れてはならないと思います。



URBANDESIGN
LABORATORY